

# 貫太郎翁とタカ様の略歴と功績 鈴木貫太郎翁について

選ばれし終戦内閣総理大臣

## 大野 要修

千葉県東葛借行会会長

河野 芳久 陸白70

本稿は、野田市教育委員会・関宿<sup>せきやど</sup>を語る会が発行した『戦後70周年記念誌 貫太郎の思い出』の一部を、許可を得て掲載したものです。内容は、鈴木貫太郎一家の幼少期、二・二六事件にまつわるエピソードであり、筆者・大野要修氏は近隣のお寺のご住職。いつもと違った面からの語り口で、借行会員にも興味深いと思われれます。なお、池上均氏（陸自73）に、野田市教育委員会との仲介の労をとっていただいた。

皆様、今日は。今、ご紹介頂きました大野でございます。これから、貫太郎さんについてお話させて頂きますが、やはり鈴木貫太郎翁ということになりますと、侍従長時代から太平洋戦争終盤に総理大臣を務められて、戦争を終結させたという辺がピークというような感じがします。この辺の事につきまましては、専門家の方々にいろいろとお話をして頂くことが多いのではな

いかなと思えます。私はあくまでも住職という立場から、違った面から貫太郎さんをお話させて頂きたいと思えます。

慶應3年、まだ江戸時代と言われた頃ですね、今の大阪府堺市の近くに、関宿藩<sup>せきやど</sup>の領地が約1万石近くありまして、そこに陣屋がありまして、貫太郎さんの父由哲さんが代官として勤めておられました。貫太郎さんは、その時に大阪で生まれております。この由哲さんという方は、近くの倉持家から鈴木家に養子に入っております。母きよさんは、今の足利市の近くに川崎ついで所がございまして、その小野寺家の、多分庄屋さんか何かですね、そういう家の三女として生まれました。そして、23歳の時に由哲さんと一緒になつて、全部で8人のお子さんを産みました。4番目が、今日の主役貫太郎翁です。5番目に、次男で陸軍大將を務めました鈴木孝雄さんが生まれております。女4人男4人の、8人兄弟でした。

「江戸に出て何かやりたい、新しいことを勉強したい」と思ひまして、2回ばかり家出をして、江戸に向かつて行ってしまふのですね。ところが、それを知った倉持家におきまして、鈴木家におきましても、いなくなつては大変だということで、途中で捕まえて関宿に連れ戻すということがありまして。そして、3度目を考えているらしいというので、多分これは倉持家の家ではないかと思うのですが「お前はこれから鈴木家に養子に入る身なのだよ。なのに、お前がそういう事でもつて他へ行つてしまつたらならば、鈴木家が潰れてしまふじゃないか」というようなことを懇々とお説教されました。出て行くということをお断り切つたと言われています。それから、お母さんのきよさんという方は、子供に対しては厳しかつたようです。由哲さんは、ほとんど子供達には怒るつて事をしなかつたようです。優しく話して納得させるというのですか、そういうお父さんだつたらしいのですが、お母さんの方は逆に、かなりきつかつたそうです。弟の孝雄さんが書かれています本等を読みますと、かなりお母さんが怖かつた。厳格な指導の下、自分達子供は母親に對して絶対服従であつたというような事が書かれています。服従であつたという言葉を書かれる位ですから、かな

りお母さんは怖かつたのではないのかなど。ただ、きついお母さんですけども、仏様の事とか神様の事に対しては大変信仰が深かつたと書かれています。特に、二十三夜様では、鈴木家に嫁いで来てからきちつとやつていたと書かれています。そういうご両親の元で、貫太郎さんは育てられたようです。貫太郎さんが生まれて、関宿に来て亡くなるまでの間に、6度の大きな危機がありました。

1度目の危機が、明治の2年、新しい時代になりました2年目にありました。今まで將軍が治めていたのが天皇の時代になつたので「陣屋を引き払つて江戸に帰つて来なさい」と上から言われて、鈴木一族は大阪から東海道をトコトコ帰つて来ました。途中、お伊勢参りをしてからまた東海道を下り、大井川を渡つて島田宿という所まで来た時に、最初の危機がありました。まだ貫太郎さんは3歳でしたから、多分お母さんの膝の上に乗せられて駕籠に乗つて来たらしいのです。そして、お昼を食べようと島田宿の宿屋に入ろうとした時に、宿屋の反対側に黄金色をした蘭玉が干してあつたそうです。親達は宿屋の前で駕籠を降りまして、貫太郎さんも駕籠から降りられました。長い間駕籠の中に座つていたという窮屈さと、目の前の黄金色した蘭玉

が気になってしようがなかった貫太郎さんは、親の手を離れて宿屋と反対側の蘭玉の方に行こうとしました。そこへ後ろから早馬が走って来て、運悪く早馬の脚元で転んでしまいました。馬に蹴られてしまうところが、馬が賢かったためか貫太郎さんを飛び越えてそのまま走り去ったのです。これが第一回目の危機でした。

2度目の危機というのは、関宿に戻った7、8歳の頃だそうです。貫太郎さんは、友達と一緒に神橋の堰樋で魚を釣っていました。自分のボジションなのか良い場所なのか分かりませんが、扉の上が良いといふのでそこへ乗って座ろうと思いましたが、ところが、貫太郎さんが乗ったままサーッと扉が下がったらしい。それで、貫太郎さんはバランスを崩して、そのままドボンと落ちてしまいました。しかし、着物を沢山着ていたから浮いてきて助かったと言っているのです。さて、皆さんどうでしょう。着物を沢山着ていたという事は、寒かったのかなと思うわけです。よく心臓麻痺を起こさなかつたなど余計にまた考えてしまいます。落ちた時に貫太郎さんは、何を考

えていたかという、思わず上を向くと水面が真っ赤に見えて、入っていくのは何か地獄の底に落ち込むように感じたといふ。その時一緒にいた友

達は「放つとけ。危ないから駄目だ。助けなくてもいい」と言う友達と、「おい、可哀相だよ。何とかしてやれよ」と言う友達がいたということです。貫太郎さんは助かりたい一心で腕を掻いていたら、岸に無事に辿り着いて友達に引き上げてもらって助かりました。

しかし、その後も大変だったらしいのです。濡れた着物を着て家に帰るとお母さんに怒られるというので2、3時間かけてまず乾かす事を考えました。その時はさすがに友達も一緒にお詫びをしてくれたので、それ程怒られずに済んだと書かれています。これが2度目の危機です。

子供時代の貫太郎さんには「泣きつ貫」というあだ名がありました。貫太郎さんは「原因は分からない。ただ何となく涙が出て来て泣きたくなるんだ」と自分で言っています。それだけ気持ちが悪かったのかも分かりませんが、ですが、よくよく考えると、お母さんの存在というのが大きかったらしいのです。お母さんの事を考えると、何か涙が出る。あまりに泣くのでお母さんが「そんなに泣くと、川崎に帰ってしまうよ。泣くんじゃありません」と言ったそうです。川崎に帰ってしまったという気持ち、その言葉が辛かったらしいんですね。だから、貫太郎さんは友達と遊んで帰って来ても、学校に

行って帰って来ても、お母さんの姿が見えないと「川崎帰っちゃったのかしら」というので泣き出したという。その位泣き虫でした。ただ、その泣き方が大変大きかったらしく近所でも有名でした。そのような話が残っています。

弟の孝雄さんは、全くその反対だったらしいのです。例えば貫太郎さんが友達に苛められると孝雄さんが出て行って相手をやっつけました。ある日は、貫太郎さんを苛めた先輩が学校へ行くのに自分の家の前を通るので、孝雄さんが「兄貴の敵を討つ」と家の前で待ち構えていました。ところが、相手は裏から学校へ逃げて行った。その位、孝雄さんが腕白だったらしいのです。

お父さんの関係で、貫太郎さんは10歳の時に前橋の小学校に移って中学校まで行くんですが、その頃、お父さんはいつも「人間は、怒るものではないよ。怒るのは自分の根性が足りないからだ。短気は損気と言ふこともある。怒ってすることは成功しない。みな、自分の損になることばかりだ。だから、決して怒ってはいけません」ということを貫太郎さんに教えていました。このことは、一生貫太郎さんの頭の中から抜けませんでした。ですから、最終的には総理大臣になっていろいろな困難を乗り越えて行くのですが、陛下の

言葉の「堪え難きを堪え……」ではありませんが、貫太郎さんはそういう意味では、心がすごく大きかったという感じがします。

このように貫太郎さんは小学校から関宿にいて、小学校途中から中学まで前橋に行きます。そして、最後は兵学校に行きます。貫太郎さんはなぜ兵学校に行ったのでしょうか。お父さんは、貫太郎さんを医者にしたかったらしく、大学まで行かせようとした。8人の子供がいましたから「1人位は大学に行かせられるだろうが、後はとてもじゃないけど無理だろう」と思っています。お父さんは貫太郎に「お前は医者にしてやるからね」と言ったのでしよう。ところが貫太郎さんは「お父さん、それは駄目です。嫌だ、やりたくない」と言いました。なぜかという、貫太郎さんが12歳の頃にお母さんが大病を患い、貫太郎さんが「先生、お母さんが大変なので往診をお願いします」と言っているのを迎えに行つたらしいのです。それで、「医者というのは、遅くても行かなくちゃならない。寒くても行かなくちゃならない。こんな辛いものは無い。私は嫌だ」と思ってしまったのです。そう思っている時に、海軍からの兵学校募集の公告が読売新聞に載つたのだそうです。おまけに、海軍の船がオーストラリアに行つた時に、

オーストラリアの人達に大歓迎を受け  
たらしいのです。「これは素晴らしい。  
私は海軍に行きたい」ただそれだけな  
のです。そして、お父さんに「兵学校  
に行かせてくれ」とお願いすると、お  
父さんに「とんでもない。お前は医者  
になるのだ。まして、総領なのだから、  
海軍なんか」と言われて、仕方がない  
など思ったみたいなのです。翌年、ま  
た同じように兵学校の募集があったの  
で、もう一回お父さんをお願いしまし  
たが、その時もお父さん「まかりなら  
ん」と許可してくれませんでした。と  
ころが、その年の秋にお父さんは前橋  
から東京まで出張しました。貫太郎さ

んは、県庁の仕事の関係で出張したの  
だなどと思っていられないのですが、  
帰って来た晩に「お前、まだ海軍に行  
きたいのか」と質問がありまして、貫  
太郎さんは「是非行かせて下さい。お  
願います。医者は嫌です」と、お父  
さんとやり合いました。そして「そん  
なに行きたいのだったらば、いいよ」  
と、やっとお父さんから許可をもらえ  
たという話があります。貫太郎さんは、  
すぐに中学校の方に退学願いを出して  
東京に出ました。そして、兵学校に行  
くには試験がありますから、近藤塾と  
いう塾でもって勉強に集中して、翌年  
の兵学校の試験を受けたところ、一発



貫太郎翁 光岳寺にて

で合格してしまった。兵学校の4期生  
4回目の入学生となりました。当時の  
兵学校は三年制らしいのです。2期生  
というのは18人しかいませんでした。  
貫太郎さんの一つ先輩の3期生は40人  
いたそうです。そして貫太郎さん達4  
期生は60人いたそうです。大雑把に  
120人いて、そのうち関東の人間は  
貫太郎さんだけだったそうです。あと  
は皆関西の人間だそうです。ですから、  
貫太郎さんが兵学校に行きたいと言っ  
た時には、周りの人達は「お前、止め  
ておけ。行つたつて駄目だから」と言っ  
たそうです。なぜかというのは、海軍  
の大半は薩摩藩が牛耳っている。陸軍  
は長州藩が牛耳っている。ですから、  
関東の人間が行つても「お前達は相手  
にされないから駄目だ」と思われてい  
たらしいのです。しかし、貫太郎さん  
が4期生で入つた翌年には、関東から  
5人の生徒が入つて来て、それから  
徐々に増えていきました。だから、あ  
の意味では関東の人間としては貫太郎  
さんが最初の口火を切つたという立場  
であつたみたいです。

に入つたところ、なぜかハマをやって  
船が乗り上げてしまったのです。そこ  
で、錨を降ろして船の重さをなくして  
浮かせようとして、小さなカッターと  
いう船2艘を使って錨をつるし、深い  
所まで引つ張つて行つて落とすとい  
う作業をすることになりました。錨は  
ロープでもって2つのカッターに吊る  
されていて、そのロープはピンを抜く  
と錨が海の底に滑り落ちる様になつて  
いました。ところが、どういいうわけだ  
か、ピンを抜いても錨が滑り落ちず  
カッターにくっ付いたままでした。そ  
れで、ロープを切れればいいということ  
になつたのですが、片方だけ切つてし  
まうと錨の重みでカッターが海に引つ  
張り込まれてしまうので、貫太郎さん  
が乗っているカッターともう一艘の  
カッターで、「一、二の、三」でロープ  
を切ろうということになりました。し  
かし、なぜか貫太郎さんの船のロープ  
が切れなかつたらしいのです。だから、  
貫太郎さんの乗っていたカッターがそ  
のままドボンと錨と一緒に海に沈んで  
しまいました。貫太郎さんは士官なの  
で指図する方ですから、錨の近くに  
立っていたため、錨と船と一緒にズル  
ズルと海に沈んでしまいました。制服  
を着て靴を履いていたので思うように  
泳げず、おまけに、腰に着けている劔  
が邪魔してロープに絡んでしまつたら

しいのです。ですから、船と一緒に約10m近く海の中へ沈んでしまいました。慌てたのではないかと思えます。何とかやっているうちに自分の手でもって船の縁に掴まりながら、上に浮き上がりました。ただ、剣が絡んでいたのでスツと上がるわけではないですから、いろいろな工夫をしたのでしよう。やつの事で上まで来た時に、船の先端の部分が、5寸って書いてありますから15cm位出たので、そこまで手を伸ばして、やつと首まで出して呼吸が出来る様になったところで、もう一艘のカッターの兵隊さんが飛び込んで助けてくれたということが書かれています。これが3回目の危機だったのです。

4度目の危機というのは、大尉になって、山東半島の突端にある威海衛という港を攻撃した時の災難なのです。この港の奥に、当時中国の軍艦が集結していたのだそうです。日本は、中国の軍艦を何とか沈めてしまおうという事で向かいました。当時、貫太郎さんは水雷艇という小さな船の艇長をやっていました。分かりやすく言うと、近くまで行って、魚雷を放つて相手の大きな船をやつつける小さくて小回りの利く船です。その船でもって大きな船をやつつけようという作戰に、一員として参加していたのです。

威海衛という軍港の造りは、裏側に山があつて、途中には砲台があつて、日本の軍艦が攻めて行くと、その船に向かって砲台から攻撃される。そして、港の前に防衛材が敷かれていて、簡単に船が入れないようになっていたらしいのです。それで、日本はその防衛材をまず取っ払うことを考えました。それは、水雷艇が近くまで行って、1個1個に爆薬をしかけて破壊していきます、攻撃水路を作って行こうという考えでした。それからもう一つは、陸軍が砲台を裏から攻めて占領して、砲台からの攻撃がないようにしようとする作戦を立てたのです。その時に貫太郎さんは、水雷艇でもって防衛材を壊しながら、攻める為の水路を作って行き、

さあよいよ攻撃準備ができたという時に、日本の水雷艇は約20隻近く入りました。貫太郎さんが指揮していた第2艇隊は水路を上手く確保したものですから「お前そこ、右、左」と指図しながら相手の軍港に入って行く先導という役を仰せ付かりました。一列縦隊で入って行き、一列横隊に並びかえて一斉に相手に向かって攻撃を仕掛けて、そのまま左廻旋して帰って来るといふ約束だったらしいのですが、後の続いて来る水雷艇は全く破壊工作をしていなかったものだから、不安があつて上手く付いて来られなかったら

しいのです。それで、自分勝手な攻撃が始まつてしまったのです。攻撃が開始され貫太郎さん達が港内に入ると、隊の一番偉い人が乗っている船が攻撃から引き返して来て「お前の目の前に大物がいるよ」と怒鳴って教えてくれました。それで、自分達の手柄にしようとして攻撃を仕掛けたのですが、水雷の発射ボタンを押してもプロペラだけがバツと空回りしているだけで飛び出さなかつたのです。そこで、貫太郎さんはこのまま向こうの大型船にぶつかつて潰してしまおうと考えたのです

が、空中で爆発すると相手に与える被害が少ないらしく、相手の船を撃沈するのであれば大きな手柄になるけれど、ただぶつかったただだと犬死と同じだということで、一度引き返して水を積み直すことにしました。しかし、Uターンして帰ろうと思つた時に、向こうから攻撃を受けてしまいました。相手の攻撃は、幸い頭の上を通過したり手前で落ちたり、大きな弾は飛んで来ませんでした。47mm砲という結構大きな弾も飛んで来て、煙突や機関室に何発か撃ち込まれましたが、幸いな事にエンジンには当たらず石炭庫に集中しました。ただ、小銃がすごかつたらしく70発近い弾が水雷艇に当たりました。そのため、貫太郎さん達は、物影に隠れてただ逃げるしかなかつた。幸

い、一人の負傷者もなく九死に一生を得ました。これが、貫太郎さんの4度目の危機でした。貫太郎さんは、戦争で死にはぐつたのはこの戦いだけですね。

5度目の危機も、大尉のときです。「金剛」という大きな船に乗っていました。軍艦の中で大きい方だとイメージして下さい。呉から東京に船を廻すということで瀬戸内海から熊野灘を通つて東京に来る途中に、お伊勢参りをしていきました。貫太郎さんは大尉という上の位で、航海長という役をやっていました。航海長というのは、艦長と一緒に行動するような、上の方の仕事ではないかと思えます。鳥羽港に入つた夜、貫太郎さんは自分の部屋が蒸し暑いものですから、寝間着を着たまま後ろの甲板に出て夕涼みしようと思ひ、大砲の砲座の所まで来ました。砲座の上は鉄格子が出ていて、風当たりが良くて休むのには好都合というところで、鉄格子の上に横になつたらしいのです。貫太郎さんは大変煙草好きでしたから、多分煙草を吸っていたのではないかと思うのです。そのうちに、ついウトウトとひと寝入りしてしまつた。それで、ふと起きた時には、自分がどこに寝ていたか全く分からなくて、頭の天辺を大砲に思い切りぶ

つけて脳震盪を起こし、そのままフラフラとしているうちに海の中へ落ちてしまったのです。頭は痛いし寝間着も着ていましたし潮の流れもありましたので、身動きが出来ずに苦勞しました。が、頑張つて泳ぎました。途中で、貫太郎さんは、「助けてくれ」と喉まで出かかったそうですが、將校が何を問違ったか海に落つこちで、下から「助けてくれ」とはとても言えないということで我慢したらしいのです。後で「あの野郎、落つこちで助けてもらった」と言われるのが嫌で、ともかく必死に泳いで行つた所に、舵に伝わる鎖があつて、それに掴まつて何とか上まで上がつて行くことができました。ところが、甲板から1m位下がつた所から鎖が下がつていたので甲板には届かなかつたのです。たまたま、ちよつと離れた所に縄梯子もあつたので、貫太郎さんはそこを何とか使えないものかと考へて、寝間着の帯を解いて結び目を作つて、綱梯子に引つ掛けて、そこからやつとの思いで甲板に上がつたそうです。それで、甲板には信号兵がいたらしいのですが、貫太郎さんは頭に来たものですから「お前、俺が落ちたのに気付かなかつたのか」と怒つたらしいのです。しかし、その信号兵は「何か先ほど後ろでポツチャンと落つこち

ような気がしました。何だか分かり

ませんでした」と言つて、簡単にあしらわれてしまつた。困つたのは翌朝食堂に行つた時に、貫太郎さんに付いてゐる若い兵隊から「航海長、寝間着が濡れていますけども、どうしたらいいですか」と、他の將校達の前で大きな声で質問されたのだそうです。それで、一斉に他の將校達も「鈴木、落つこちだな」というので、笑ひ者にされてしまつたのだそうです。その晩は鳥羽の町に上がりまして、他の將校達に一杯飲ませて生還祝ひをしたということが書かれています。

6度目の危機に行く前にちよつとだけ寄り道をさせて下さい。軍艦から海に落ちた後に、貫太郎さんはドイツ留学に行つてゐるのです。その時にヨーロッパ諸国を回つてゐます。ドイツをはじめ、イギリス、フランス、スペイン、イタリア、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、ロシア。あくまでも私見なのですが、デンマークに行つたていうのが、すごく気になつてゐます。デンマークの酪農というものが、昔の日本の酪農に近い形であるということですが、私が前に教わつたヨーロッパの農業のうちの一つの、デンマークの酪農というの、1軒の農家で乳牛を2頭から3頭飼ひまして、それを搾つて、牛乳を出荷してゐる。それが特色だといふようなことを教わつた感じがした

のですけれども、そのことを思うと、貫太郎さんはドイツに留学してヨーロッパ諸国を回つた時に、デンマークでもつてそういう経験をされたことが、戦後関宿に帰つて来て、この関宿の地に酪農を広めるきっかけとなつたのではないかなど。多分、デンマークへ行つていなければ、違う形になつたかも知れないです。デンマークで酪農の形態を見てきたものが、関宿に帰つて「ああ、そうだ。昔デンマークに行つた時に、デンマークではこんなことやつていたつけな」と思ひ出して、関宿の農家の方々に、乳牛を飼つて、乳を搾つて収入を得るといふ形を、奨励指導したのではないかとというのが私の推論です。

6度目の危機というのは、皆さんが知つてゐる二二六事件です。この事件ですが、昭和11年2月26日午前4時に、青年將校約30人位が鈴木邸に押し込んで来て、鈴木さんをピストルで撃ちました。4発撃つたらしいのですが、奇跡的に鈴木さんは命を取り留めました。

私はここで長男の鈴木一さんが、『鈴木貫太郎自伝』の中で書き残してゐる部分をお話したいと思つてゐます。一さんは、貫太郎さんが4発の凶弾から生還したのは「九つの歯車」が上手く噛み合つたからだと言つてゐます。こ

の「九つの歯車」が一個でもずれたならば、貫太郎さんはこの世にはいなかったらうという事で、奇跡と言つていいでしょうね。

一さんは「九つの歯車」と言つてゐますが、一つ目というのが、青年將校達が鈴木邸に押し入つた時に、守衛とか警視庁の私服の刑事が門を守つてゐたわけですが、この人達がいつも簡単にギブアップした、要するに包囲されて抗うことができなかったということです。ですから、そのままスツツと簡単に鈴木邸に入つてしまつた。この時、逆にその私服警官達が、相手に向かつて拳銃を発砲していたら、貫太郎さんはあの中で完全に殺されたのではないかと、兵隊がスツツと中まで入つてしまつたから、それがなかつたのではないかとということですが、

それから二つ目というのが、貫太郎さんは自分が寝ている隣の部屋の床の間かどこかに日本刀を置いていたのですが、物騒だということでもタカさんが片付けてしまつたので、いざという時に見つからなかつたということですが、兵隊がやつて来たときに、貫太郎さんが隣の部屋から日本刀を持ってきて戦う準備をしようと思つたのですが、いくら探してもないので諦めてまた元の部屋に入つた。そこに兵隊さんが入つてきたので、刃向かわなかつたとい

ことです。

三つ目というのが、1発目、最初のピストルの弾は当たらずに後ろの唐紙にぶつかり、2発目が股から入って辜丸の裏側で止まり、致命傷にならなかったということでした。

四つ目というのが、弾が左の乳房の内側から入って心臓の裏に周って止まり、心臓に害が無かったということでした。

五つ目というのが、弾が眉間から入って左の耳に抜け、脳から凄惨な出血があつたらしいのですが、もろに入らなかつたということでしょうね。後々貫太郎さんの耳が悪くなったというのは、実はそこだつたのです。

六つ目というのが、伍長が「止めを刺しましょうか」と安藤大尉に聞きましたが、貫太郎さんが倒れているところを安藤さんがまともに見た時に血の海になっており、「これだけ血が流れているから、もうよろしい」と撃たせなかつたことです。

七つ目というのが、貫太郎さんは撃たれて倒れて後、まったく動かなかつたということです。動かかなかつたことで余計な出血を抑えることができたのです。

八つ目というのが、外科の名医であつた飯島先生という方が、救命のために鈴木郎に向かつた時に途中で歩哨

兵に止められたのですが、その歩哨兵が飯島先生の元患者だつたことから飯島先生を通してくれたことです。途中まで兵隊さんが一緒に行つて「ここまで来ればもう大丈夫だから、どうぞお通り下さい」と言つて送つたという話もあるのですけども、兵隊さんが止めた時に、飯島先生の患者だつたためか「分かりました。どうぞ」と通してくれたのです。

九つ目というのが、O型の血液の青年が来て、輸血をする事ができたという事です。

この「九つの歯車」が、大事でした。一つでもずれたならば、貫太郎さんはいなかつた。ということとは、終戦総理大臣という立場もなかつたのです。

私が一番何を言いたいかというと、人間6度も死にはぐるなんていうことがあるのだろうか、神様や仏様に守られていたのではないかと。そして、神様や仏様に「鈴木貫太郎、これから起ころである戦争の終結をこいつに任せよう。やらせよう」と決められていたのではないかと気がします。それが、昭和天皇と陸軍大臣の阿南さんと3人が苦勞して、無事に終戦という

ような所まで繋がつていったのではないのかと、やはり選ばれた人間なのかという感じがするのです。

その一つの資料として「鈴木貫太郎

傳』に「毘沙門天。夢枕に立つ！」というのがあります。これは貫太郎さんが襲われまして、3日目のことであつたと思いますが、ちよつと読んでみたいと思います。

『おタカ、昨夜は面白い夢を見たよ』と言う。青年将校らに襲われて3日目の朝である。タカ夫人が『どんな夢でした？』と聞くと、真つ白い着物を着た観音様のような人が来て、『私は大和から来た。お前を助けるから、もう大丈夫だ』と言つた。『それは良い夢でございませぬ。きつと大丈夫です』と、タカ夫人が喜んだが、本当に助かつた。だが、大和の観音様ではわからない。どこだろう？ 全快してからも、夫婦で話し合つたがわからなかつた。ふと鈴木がこんなことを言い出した。『あれは信貴の毘沙門様だつたのかも知れない』と。貫太郎の上に女の子が3人いた。『どうか男の子が授かりたい』と信貴の毘沙門様に参詣してお願いをした。そうするとまもなく母が妊娠して、生まれたのが、貫太郎であつた。『この子は毘沙門様からの授かり子だ』と、父母がよく話していたのを思い出した。

こう書かれています。ですから、毘沙門様はじめ、いろんな意味で神様や仏様は貫太郎さんという人の命を守つていたのではないか。そして、この日

本の国の「万世の為に太平を開く」という大役を任せただけではないのか。ですから、8月15日までに、最後の命が燃え尽きるまでのエネルギーを使い果たしてしまつたのかなと、そんな感じがしております。

あと、私達がやはり、鈴木貫太郎という一人の人間を次の世代の人達に語り伝えて、自分の孫や曾孫達の代になつても、自分達の郷土にはこういう人達が住んでいる世界の平和を創り上げたのだという話を、胸を張つて語れるようなものを残せたら、自分達の役目も済むのかなという感じがしております。

今回は、6度の危機ということを中心にして、貫太郎さんを語らせて頂きました。以上でもつて話を閉じさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。